

## 「伊勢物語詞連歌」 翻刻と紹介

小山順子  
竹島一希

特定の古典文学の詞章を各句毎に撰取する「詞連歌」は、室町時代後期のある一時期に伝存作品が集中する。稿者は前稿において、その中の一つである「新古今集詞連歌」を取り上げ、詞連歌に繋がる古典撰取の史的概括と、その詞章撰取の特徴とを論じた。<sup>〔注〕</sup>

今回は、大永元（一五二一）年十月六日に詠まれた「伊勢物語詞連歌」を対象として、『伊勢物語』受容の一斑を考察する。今号は、本文の翻刻と、百韻に賦物として用いられた『伊勢物語』の該当箇所指摘にとどめ、具体的な検討と考察は稿を改める。

〔注〕 小山順子・竹島一希「新古今集詞連歌」翻刻と紹介」（京都大学国文学論叢」第18号・平成19年9月）、小山順子「新古今集詞連歌」考察——和歌句題、続歌と詞連歌——」・竹

島一希「新古今集詞連歌」の本歌と付合」（同誌第19号・平成20年3月）

### 〈書誌〉

【底本】  
・宮内庁書陵部蔵『賦物連歌 四』（桂宮17―456―50）所収本。

### 〈翻刻〉

【凡例】  
・漢字は通行の字体で統一する。  
・本文に見られる傍線は、伊勢物語詞に該当する詞を明示





72 我もこもれりむろの戸の中 民部卿  
 73 しづけさは猶行ゆきて山のおく 親王御方  
 74 日ぐれになりぬ鳥かへる空 中務卿宮  
 75 人にこそこのらめ春のこゝろばえ  
 76 花のしなひのあかぬ藤浪 親王御方  
 77 鶯楓はしげる色なき中がきに 民部卿  
 78 我身ひとつはもとのふるさと 冷泉前中納言  
 (名才)  
 79 わづかなるたらひのかげに星をみて 民部卿  
 80 まだ夜ぶかきにいぞつかふる 中御門大納言  
 81 みつぎ物千さゝげばかりはこぼらし 冷泉前中納言  
 82 世に道しれる人のかしこさ 鷺尾中納言  
 83 夏冬を竹のはやしに送りきて 中務卿宮  
 84 もみぢもはなも夢にみなしつ 秀房朝臣  
 85 命たゞたのまぬものゝながらへぬ 四条中納言  
 86 すくせつたなく身こそふりぬれ 親王御方  
 87 たかやすのさとのかよひぢ絶ぐに 甘露寺中納言  
 88 雪のつもるぞ夕さびしき 鷺尾中納言  
 89 昨日けふありしよりけにさえくくて 親王御方  
 90 友なし千どりなきに鳴けり 親王御方  
 91 釣舟は波いとたかし帰るらん  
 92 又笛をふき歌うたふ声」

(名ウ)  
 93 物ごとこゝろひとつをうつしきて 中務卿宮  
 94 いざこの山にはるをくらさむ 帥大納言  
 95 ぬれて行雨はふるとも桜がり 冷泉前中納言  
 96 野辺は霞にかぎりしられず 重親  
 97 いでぬやと立てみ居てみ空の月 民部卿  
 98 よるのおましも秋さむき比 親王御方  
 99 をく霜は菊の花さく垣ねにて 鷺尾中納言  
 100 玉にぬくべき露のかずく  
 御製 十六句  
 親王御方 十 鷺尾中納言 四  
 中務卿宮 八 甘露寺中納言 七  
 民部卿 十 秀房朝臣 六  
 中御門大納言 八 長淳 一  
 帥大納言 九 重親 四  
 冷泉前中納言 十一  
 四条中納言 六

〔凡例〕  
 (校異)

・以下に掲げる諸本との校異を示す。

・ミセケチは（へ）で示した。

・仮名遣いの違いを修正するミセケチ、及び本文の仮名に漢字を宛てた傍記は、校異として取らなかつた。

【対校本】

・陽：陽明文庫蔵『古連歌異躰』（近／243／99）所収本。

・統：宮内庁書陵部蔵『続群書類従 四七七』（453―2）所収本。

・山：実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本。国文学研究資料館所蔵のマイクロ資料（ヤ3―36―1―1、D1820）に拠る。本奥書に「此連哥筆者／西洞院前大納言殿舎弟／

采女正殿筆也／右壺冊山本氏被惠賜也／能奏花押」とある。もとは葛野勝成（西洞院時成（一六四五年―一七二四年）

の弟）筆の本であつたことが分かる。昭和三年七月二三日に、山岸徳平氏が能勢氏（朝次氏力）蔵本を書写し、翌日

校合を加えた旨の書写奥書がある。

・大甲：大阪天満宮蔵『古代連歌』（れ5の30）所収本。なお、この本の傍記は全て朱筆である。

・大乙：大阪天満宮蔵『古連歌二千』（れ甲の1）所収本。  
・異：京都大学文学部国語学国文学研究室蔵『異例連譚』

（国文／GI／4）所収本。初折のみ。

「端作」大永元年十月六日―大永元年十月六日 伊勢物語

百韻（統） 賦伊勢連歌―賦伊勢連歌（大甲・大乙）

「本文」1作者名無記―御製（大甲）・御製（大乙）

2さむさ―寒る（統）・冴る（大甲・大乙） 4こそりて

も―こそりてそ（大甲・大乙） わたしもり―渡船（大甲）

・渡ふね（大乙） 7みん―見て（大乙） 9四条中納言

―四条大納言（統） 10暮かた―たくれ（統）・夕暮（大

甲・大乙） 16いとゆふ―いといふ（山） 17あこかれて

―あくかれて（陽・異） 19すまふ―すまぬ（統） ちか

らかは―契りかも（統）・契かは（大甲・大乙） 20庭は

―庭の（統・大甲・大乙） 22きけ―きく（統・大甲・大

乙） 23みゆる―みつる（大甲・大乙） 24みやこしまへ

の―都しらしの（大乙） やすらひ―休らへ（大甲・大乙）

25よせかへり―かせかへり（大乙） 26ゆけは―行は（大

甲・大乙） 39なけは―泣は（大甲・大乙） 41水―石（大

甲）・石（大乙） 44ひめもすに―終日に（大甲・大乙）

45成にけり―成にてん（大甲）・成にける（大乙） 46

とりあへて―とりあへず（大乙） 48渚―儲渚（大乙） よ

するなり―よするらし（大甲） 50夕すゝみする―夕すゝ

みとる (大甲・大乙) 比ほひ―此ころ (大甲・大乙)  
 51 あかて―飽て (大甲) 53 秋のうき―秋うき (大甲) 55 秋  
 うき (大乙) 打わひぬ―うき恠ぬ (大甲・大乙) 55 し  
 たはれて―したはれぬ (統) 57 酒―海 (大甲) のみつ  
 ー呑つゝ (大甲)・呑て (大乙) をくらなん―送り  
 なん (統) 58 我と―我に (大甲・大乙) なる―なき (統)  
 62 おもしろく―おもしろく (大甲)・おもしろく (大乙)  
 63 みさして―みたして (山) 64 よると―よるも (大乙)  
 71 よはひをは―齢をも (統) 仏神―神仏 (統・大甲・  
 大乙) 72 こもれり―こもれる (山) 74 日くれに―日く  
 れ (ぬ) (山) 76 しなひ―しなえ (大甲・大乙) 77 葛  
 楓は―葛楓 (統)・葛栴 (大甲・大乙) しける―しけほ  
 る (統) 79 わつかなる―はつか成 (大甲・大乙) 80 い  
 てそ―いてゝ (統)・出て (大甲・大乙) 81 みつき物千  
 さゝけはかり―御調物千棟さゝけ斗 (統)・御調物千棟さ  
 々け斗は (大甲・大乙) 84 みなしつ―みなし (て) (山)  
 85 たのまぬものゝの―たのまぬそのゝ (山)・たのまぬ  
 物は (大甲・大乙) なからへぬ―な (から) (ぬ) (大甲)  
 87 つもるそ―つもりて (統)・つもりそ (山・大甲・大  
 乙) 89 ありしよりけに―有しよりけに (大甲) 90 なき  
 に鳴けり―な (き) に鳴なり (大甲) 92 うたふ―うとふ  
 (大乙) 98 よるの―夜半の (大甲・大乙) 99 霜露 (大

甲・大乙)

「句上」統では、句上の順序が以下の通りである。「御製  
 ・親王御方・中務卿宮・民部 (宮)・甘露寺中納言・帥大  
 納言・冷泉前中納言・四条中納言・鸛尾中納言・長淳・重  
 親・秀房朝臣・中御門大納言」冷泉前中納言―冷泉大納  
 言 (大甲・大乙) 大甲・大乙では、長淳・重親の順が逆  
 になっている。

「傍線」ナシ (統・大甲・大乙)

〈連衆〉

御製―後柏原天皇。当時、五八歳。

親王御方―知仁親王 (後の後奈良天皇)。当時二六歳。

中務卿宮―伏見宮貞敦親王。後柏原天皇の猶子。一字名は

松。当時、三四歳。

民部卿―甘露寺元長。当時、民部卿、賀茂伝奏、正二位前

権大納言、六六歳。

中御門大納言―中御門宣秀。当時、正二位権大納言、五三

歳。

帥大納言―三条西公家。一字名は蒼。当時、太宰権帥、從

二位権大納言、三五歳。

冷泉前中納言―冷泉永宣。当時、從二位前権中納言、五八

歳。

四条中納言―四条隆永。当時、従二位権中納言、四四歳。  
鷲尾中納言―鷲尾隆康。当時、正三位権中納言、三七歳。

甘露寺中納言―甘露寺伊長。当時、参議、左大弁、従三位  
権中納言、二八歳。

秀房朝臣―万里小路秀房。当時、参議、右大弁、正四位上、  
三〇歳。

長淳―東坊城長淳。当時、侍従、従五位下、十六歳。  
重親―庭田重親。当時、歳人頭、正四位上、二七歳。

### 〈伊勢物語詞の出典〉

#### 【凡例】

・ 掲出した本文は、陽明文庫本・続群書類従本・山岸本・  
大阪天満宮甲本・大阪天満宮乙本・異例連詞本を参照して  
校訂したものである。但し、底本の本文には、他本によつ  
て校訂されるべき箇所は認められなかった。

・ 典拠として掲出した『伊勢物語』本文は、三条西実隆筆  
天福本『伊勢物語』（愛媛大学古典叢刊 1・昭和45年）に  
よる。章段番号は新編日本古典文学全集12『竹取物語 伊  
勢物語 大和物語 平中物語』（小学館・平成6年）、歌  
番号は『新編国歌大観』（角川書店）を参照した。（章段

番号・歌番号）の順で示した。また、物語本文には、読み  
やすさを考慮して、適宜濁点、句読点を付した。

・ 句とその典拠とを比較して、底本で引かれている傍線が、  
典拠から撰取された部分の指摘として不十分であると判断  
された場合、傍線の長さを調節した。句とその典拠が完全  
には合致しないときは、波線でそれを示した。また、傍線  
部以外の箇所でも典拠と重なる素材（語句）を破線で示した。  
・ 作者名が記されていない句は、全て御製と判断し、改め  
て明示した。

1 冬の日の夕かげまたぬ時雨かな 御製

我ならでしたひもとくなあさがほのゆふかげまたぬ花に  
はありとも (二七段・七一番歌)

2 さむさををくる風はやみなり 民部卿

あまぐものよそにのみしてふることはわがゐる山の風は  
やみ也 (一九段・三三番歌)

3 薄ごほり水ゆく川の音たえて 親王御方

そこをやつはしといひけるは、水ゆく河のくもでなれば、  
はしをやつわたせるによりてなむ、やつはしといひける。

(九段)

4 舟こぞりてもよぶわたしもり 中御門大納言  
とよめりければ、舟こぞりてなきにけり。(九段)

5 友とする人はまれなる道の末 中務卿宮

京やすみうかりけん、あづまの方にゆきて、すみ所もと  
むとて、ともとする人、ひとりふたりしてゆきけり。(八段)

6 雲なかくしそ月いづる山 帥大納言

君があたり見つゝをゝらんいこま山くもなかくしそ雨は  
ふるとも (二三段・五〇番歌)

7 色くのみぢの千種よるもみん 冷泉前中納言

きくの花うつろひさかりなるに、もみぢのちぐさに見ゆ  
るおり、(八一段)

8 かくこそ秋の露ははらはめ 秀房朝臣

君がためたおれる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしに  
けれ (二〇段・三四番歌)

四条中納言

9 いくたびか行てはきぬる鹿の声  
いたづらに行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいざな  
はれつゝ (六五段・一二二番歌)

10 我も田づらにかよふ暮がた 甘露寺中納言

うちわびておちぼひろふときかませば我も田づらにゆか  
ましものを (五八段・一〇六番歌)

11 旅の宿けふの入逢きゝわびて 鷺尾中納言

けふのいりあひ許にたえいりて、又の日のいぬの時ばか  
りになん、からうじていきいでたりける。(四〇段)

12 雲のたちまひ嵐ふくやま 重親朝臣

きのふけふくものたちまひかくろふは花のはやしをうし  
となりけり (六七段・一二四番歌)

13 まがひつゝ友にこそちれ花の雪 御製

千々の秋ひとつの春にむかはめやもみぢも花もともにこ  
そちれ (九四段・一六九番歌)

14 別おしみて春したふ比 親王御方

おとこ、宮づかへしにとて、わかれおしみてゆきにける

まゝに、 (二四段)

なりなん (二二三段・二〇六番歌)

15 日のながき時はやよひのつれかくに 冷泉前中納言  
時はやよひのつごもりなりけり。 (八三段)

16 みだれそめにしいとゆふのかげ 帥大納言

みちのくの忍もぢずりたれゆへにみだれそめにし我なら  
なくに (一段・二番歌)

17 我こゝろいやはかなにもあこがれて 中御門大納言

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり  
まさる哉 (一〇三段・一七九番歌)

18 身もいたづらにならむ恋路か 甘露寺中納言

かくかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらになり  
ぬべければ、つゝにほろびぬべし、とて、 (六五段)

19 いとへどもさりとしてすまふちからかは 民部卿

女もいやしければ、すまふちからなし。 (四〇段)

20 からはぬ庭はいとゞふか草 中務卿宮

年をへてすみこしさをいでゝいなばいとゞ深草野とや

21 すみどころもとむる月や露の上 御製

京やすみうかりけん、あづまの方にゆきて、すみ所もと  
むとて、ともとする人、ひとりふたりしてゆきけり。 (八段)

22 かずく虫のなく声をきけ 長淳

いでゝいなばかぎりなるべみともしけち年へぬるかとな  
くこゑをきけ (二九段・七五番歌)

23 心ぼそくすゞるにみゆる秋の暮 四条中納言

うつ山にいたりて、わがいらむとするみちはいとくら  
うほそきに、つたかえではしげり、物心ぼそく、すゞら  
なるめを見ることと思ふに、す行者あひたり。 (九段)

24 みやこしまべの旅のやすらひ 冷泉前中納言

をきのゐて身をやくよりもかなしきは宮こしまべのわか  
れなりけり (二二五段・一九六番歌)

25 うら波はしほひしほみちよせかへり 中御門大納言

いはまよりおふる見るめしつれなくはしほひしほみちか

ひもありなん

(七五段・一三七番歌)

26 松かげゆけばたゞぞ囁なる

帥大納言

おきなさび人などがめそかり衣けふばかりとぞたづもな  
くなる (一一四段・一九五番歌)

27 恋すとも人などがめそ翁さび 民部卿

おきなさび人などがめそかり衣けふばかりとぞたづもな  
くなる (一一四段・一九五番歌)

28 千世もといのる中<sub>中</sub>はかはらじ 秀房朝臣

世中にさらぬわかれのなくも哉千よもといのる人のこの  
ため (八四段・一五四番歌)

29 年だにも十といひしは昔にて 中務卿宮

年だにもとおとてよつはへにけるをいくたびきみをたの  
みきぬらん (一六段・二五番歌)

30 ながめせしまにうづる春秋 甘露寺中納言

※花の色はうづりにけりないたづらに我が身世にふるなが  
めせしまに (古今集・春下・一一二・小野小町)

(注) 傍線部は『伊勢物語』には出典として該当す

る箇所が見当たらなかった。点線部との重複  
から、古今集歌を典拠と判断した。

31 かくて身の<sub>中</sub>わたらひいかざせん 御製

むかし、あなかわたらひしける人の子ども、井のもとに  
いでゝあそびけるを、 (一二三段)

32 とはに波こす川づらのさと 冷泉前中納言

風ふけばとはに浪こすいはなれやわが衣手のかはく時な  
き (二〇八段・一八六番歌)

33 草の戸にほたるのともす火はみえて 重親

くるまなりける人このほたるのともす火に見ゆらん、  
ともしけちなむずるとて、のれるおとこのよめる。 (二九段)

34 久しくなりぬさみだれの空 親王御方

時世へてひさしくなりにければ、その人の名わすれにけ  
り。 (八二段)

35 ぬれつゝもしみでわけゆく露の暮 中御門大納言

ぬれつゝぞしみておりつる年の内にはるはいくかもあら

じとおもへば

(八〇段・一四三番歌)

ましものを

(六段・七番歌)

36 袖のせばきにあき風もうし

御製

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるかそでの  
せばきに  
(八七段・一五九番歌)

41 瀧しろく水はしらせてすむ宿に

冷泉前中納言

その山しなの宮に、たきおとし、水はしらせなどして、  
おもしろくつくられたるにまうでたまうて、(七八段)

37 人しれずおもふ恨の身にしみて

甘露寺中納言

いかでかは鳥のなく覧人しれず思ふ心はまだよぶかき  
(五二段・九九番歌)

42 春のものとて月なかつみそ

秀房朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめ  
くらしつ  
(二二段・三番歌)

38 こゝちしぬべくしたふかへるさ

帥大納言

むかし、おとこ、わづらひて、心地しぬべくおぼえけれ  
ば、  
(一一五段)

43 梅やなぎしたにかくるまどゐりして

御製

さく花のしたにかくる人をおほみありしにまさるふち  
のかげかも  
(二〇一段・一七七番歌)

39 なけば猶血の涙さへ落つべし

御製

にはかに、おや、この女をひうつ。おとこ、ちのなみ  
だをながせども、とむるよしなし。  
(四〇段)

44 たゞひめもすに花は猶見ん

親王御方

ゆき、こぼすがごとふりて、ひねもすにやまず。  
(八五段)

あけばおはりのくにへたちなむとすれば、をとこも人し  
れずちのなみだをながせど、えあはず。  
(六九段)

40 玉かなにぞとどへば石なり

民部卿

しらたまかなにぞと人のとひし時つゆとこたへてきえな

45 あしたよりくもりて雨に成にけり

民部卿

河内のくに、いこまの山を見れば、くもりみはれみ、た  
ちるくもやまず。あしたよりくもりて、ひるはれたり。  
(六七段)

46 笠もとりあへでいそぐ旅人 中務卿宮

とよみてやれりければ、みのもかさもとりあへで、しと  
ゞにぬれてまどひきにけり。 (二〇七段)

47 橋のうへひとりふたりもあやうきに 御製

京やすみうかりけん、あづまの方にゆきて、すみ所もと  
むとて、ともとする人、ひとりふたりしてゆきけり。 (八段)

48 渚の家はふねよするなり 帥大納言

いまかりするかたのゝなぎさの家、そのゐんのさくら、  
ことにおもしろし。 (八二段)

49 をのづから渡のうきみるひろはなん 中御門大納言

つとめて、その家のめのもいでも、うきみるのなみ  
によせられたるひろひて、いゑの内にもてきぬ。 (八七段)

50 タすゝみするあつき比ほひ 四条中納言

時はみな月のつごもり、いとあつきころをひに、夜ゐは  
あそびをりて、夜ふけて、やゝすゞしき風ふきけり。

(四五段)

51 郭公ながなく声も猶あかで 冷泉前中納言

ほとゝぎすながなくさとのあまたあれば猶うとまれぬ思  
ものから (四三段・八〇番歌)

52 山のはなくは月もまたれじ 秀房朝臣

をしなべて峯もたひらになりなゝむ山のはなくは月もい  
らじを (八二段・一五〇番歌)

53 秋のうさなみだおとして打わびぬ 帥大納言

みな人、かれないひのうへになみだおとしてほとびにけり。 (九段)

54 夢かうつゝか露の別路 甘露寺中納言

きみやこし我やゆきけむおもほえず夢かうつゝかねてか  
さめてか (六九段・一二六番歌)

55 又こんはしるよししてもしたはれて 民部卿

むかし、おとこ、うゐかうぶりして、ならの京かすがの  
さとにしろよしゝて、かりにいにけり。 (一段)

むかし、おとこ、津のくに、むばらのこほり、あしやの

さどにしるよして、いきてすみけり。 (八七段)

56 はかなや何をあすの世のこと 御製

さくら花けふこそかくもにほふともあなたのみがたあす  
のよのこと (九〇段・一六四番歌)

57 さけをのみのみつゝ日をばをくらなん 帥大納言

かりはねむごろにもせで、さけをのみのみつゝ、やまと  
うたにかゝれりけり。 (八二段)

58 我とひとしき人ぞ友なる 冷泉前中納言

おもふこといはでぞたゞにやみぬべき我とひとしき人し  
なければ (一一四段・二〇八番歌)

59 山かげもいほりあまたのすまひにて 中御門大納言

名のみたつしでのたおさはけさぞなくいほりあまたとう  
とまれぬれば (四三段・八一番歌)

60 嶺もたひらに道ぞつゞける 四条中納言

をしなべて峯もたひらになりなゝむ山のはなくは月もい  
らじを (八二段・一五〇番歌)

61 雪きえて水こそまされ瀧つ川 秀房朝臣

夜ぬごとにかはづのあまたなくたには水こそまされ雨は  
ふらねど (二〇八段・一八七番歌)

62 いとおもしろくかすむをちこち 甘露寺中納言

そのさには、かきつばた、いとおもしろくさきたり。 (九段)

このおとこ、人のくにより夜ごとにきつゝ、ふえをいと  
おもしろくふきて、こゑはおかしうてぞ、あはれにうた  
ひける。 (六五段)

かも河のほとりに、六條わたりに、家をいとおもしろく  
つくりて、すみたまひけり。 (八一段)

63 暮ぬとて花をみさしてかへらめや 中務卿宮

これは、齋宮の物見たまひけるくるまに、かくきこひた  
りければ、見さしてかへり給にけりとなん。 (二〇四段)

64 月には雁のよるとなくなる 御製

みよしのゝたのむのかりもひたぶるにきみがゝたにぞよ  
るとなくなる。 (二〇段・一四番歌)

65 うかれつゝ君があたりの露にねて 重親朝臣

うかれつゝ君があたりの露にねて 重親朝臣

君があたり見つゝをくらんいこま山くもなかくしそ雨は  
ふるとも (二二段・五〇番歌)

66 物おもふ人は秋やかなしき 帥大納言

我許物思人は又もあらじとおもへば水のしたにも有けり  
(二二段・五九番歌)

67 とふこともうとまれぬればたのまれず 親王御方

名のみたつしでのたおさはけさぞなくいほりあまたとう  
とまれぬれば (四三段・八一番歌)

68 あだにちぎりていまのくやしき 冷泉前中納言

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我やすま  
ひし (二二段・三七番歌)

69 あらましやおりふしごにかはるらん 中御門大納言

おもはずはありもすらめど事のはのをりふしごにたの  
まるゝ哉 (五五段・一〇一番歌)

70 たかきいやしきねがひこそあれ 御製

あふなく思ひはすべしなぞへなくたかきいやしきくる  
しかりけり (九三段・一六七番歌)

71 よはひをば仏神にもいのりきて 四条中納言

わがかゝる心やめたまへと、ほとけ神にも申けれど、  
(六五段)

72 我もこもれりむろの戸の中 民部卿

むさしのはけふはなやきそわかさのつまもこもれりわ  
れもこもれり (二二段・一七番歌)

73 しづけきは猶行ゆきて山のおく 親王御方

猶ゆきくゝて、武蔵のくにとしもつぶさのくにとの中に、  
いとおほきなる河あり。 (九段)

74 日ぐれになりぬ鳥かへる空 中務卿宮

その木のもととはたちてかへるに、日ぐれになりぬ。  
(八二段)

75 人にこそこのらめ春のこゝろばえ 御製

うたよむ人々をめしあつめて、けふのみわざを題にて、  
春の心ばえあるうた、ゝてまつらせたまふ。 (七七段)

76 花のしなひのあかぬ藤浪 親王御方

その花のなかに、あやしきふぢの花ありけり。花のしな  
ひ、二尺六寸ばかりなむありける。 (二〇一段)

77 蔦楓はしげる色なき中がきに 民部卿

うつの山にいたりて、わがいらむとするみちはいとくら  
うほそきに、つたかえではしげり、物心ほそく、すゞろ  
なるめを見ることゝ思ふに、寸行者あひたり。 (九段)

78 我身ひとつはもとのふるさと 冷泉前中納言

月やあらぬ春や昔のはるならぬわが身ひとつはもとの身  
にして (四段・五番歌)

79 わづかなるたらひのかげに星をみて、 御製

女の、手あらふ所に、ぬきすをうちやりて、たらひのか  
げに見えけるを、 (二七段)

80 まだ夜ぶかきにいぞつかふる 民部卿

いかでかは鳥のなく覧人しれず思ふ心はまだよぶかきに  
(五二段・九九番歌)

81 みつぎ物千さゝげばかりはこぶらし 中御門大納言

たてまつりあつめたる物、ちさゝげ許あり。 (七七段)

82 世に道しれる人のかしこさ 冷泉前中納言

みちしれる人もなくて、まどひいきけり。 (九段)

83 夏冬を竹のはやしに送りきて 鷲尾中納言

わがゝどにちひろある影をうへつれば夏冬たれかゝくれ  
ざるべき (七九段・一四二番歌)

84 もみぢもはなも夢にみなしつ 中務卿宮

千々の秋ひとつの春にむかはめやもみぢも花もともにこ  
そちれ (九四段・一六九番歌)

85 命たゞたのまぬものゝながらへぬ 秀房朝臣

君こむといひし夜ごとにすぎぬればたのまぬ物のこひつ  
ゝぞふる (二二段・五一番歌)

86 すくせつたなく身こそふりぬれ 四条中納言

かゝるきみにつかうまつらで、すくせつたなく、かなし  
きこと、このおとこにほだされて、とてなんなきける。  
(六五段)

87 たかやすのさとのかよひぢ絶々に 御製

かうちのくに、たがやすのこほりに、いきがよふ所いで  
きにけり。(二二段)

88 雪のつもるぞ夕さびしき 親王御方

おもへども身をしわけねばめがれせぬゆきのつもるぞわ  
が心なる (八五段・一五五番歌)

89 昨日けふありしよりけにさえくして 甘露寺中納言

わする覽と思心のうたがひにありしよりけに物ぞかなし  
き (二二段・四一番歌)

90 友なし千どりなきに鳴けり 鷺尾中納言

せむ方もなくて、たゞなきになきけり。(四一段)

91 釣舟は波いとたかし帰るらん 親王御方

その夜、南の風ふきて、浪いとたかし。(八七段)

92 又笛をふき歌うたふ声 御製

このおとこ、人のくにより夜ことにきつゝ、ふえをいと  
おもしろくふきて、こゑはをかしうてぞ、あはれにうた  
ひける。(六五段)

93 物ごとにこゝろひとつをうつしきて 中務卿官

あひ見ては心ひとつをかはしまの水のながれてたえじと  
ぞ思ふ (二二段・四四番歌)

94 いぎこの山にはるをくらさむ 帥大納言

いぎ、この山のかみにありといふぬのびきのたき見にの  
ぼらん、といひて、(八七段)

95 ぬれて行雨はふるとも桜がり 冷泉前中納言

君があたり見つゝをらんいこま山くもなかくしそ雨は  
ふるとも (二二段・五〇番歌)

96 野辺は霞にかぎりしられず 重親

かすがのゝわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎり  
しられず (一段・一番歌)

97 いでぬやと立てみ居てみ空の月 民部卿

又のとしのむ月に、むめの花ざかりに、こぞをこひてい  
きて、たちて見、あて見、れど、こぞににるべくもあ  
らず。(四段)

98 よるのおましも秋さむき比 御製

みこよろこびたまふて、よるのおましのまうけさせ給。

(七八段)

99 をく霜は菊の花さく垣ねにて 親王御方

「鴈なきて菊の花さく秋はあれど春のうみべにすみよしの  
はま (六八段・一二五番歌)

〔付記〕

本稿は、平成二〇年度科学研究費補助金(若手研究スタートアップ)による研究成果の一部である(小山順子)。

本稿は、平成二〇年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である(竹島一希)。

100 玉にぬくべき露のかずく 鷺尾中納言

「白露はけなばけなゝんきえずとてたまにぬくべき人もあ  
らじを (二〇五段・一八一番歌)

(二やま じゅんこ・天理大学専任講師)

(たけしま かずき・日本学術振興会特別研究員)